

大西信弥物語

【志信会設立前夜】

大西信弥が 志信会創設までに歩んできた道のりと志信会の 存在意義を問う実話です。

著：大芝太郎

電書版：あるほっぷ倶楽部

「生きろ！」 ～ 志信会創設の根底にあるもの～

「生きろ！」 ～ 志信会創設の根底にあるもの～

大西信弥が志信会の活動を通して、皆さんにお伝えしたいことはとても単純で、「生きろ！」これだけのことです。大西信弥が伝えたい「生きる」ことの意味については、吉田松陰の言葉を借りれば、

「世の中には、生きながら心の死んでいる者がいるかと思えば、その身は滅んでも魂の存する者もいる。

死して不朽の見込みあらば、いつ死んでもよいし、生きて大業を為す見込みあらば、いつまでも生きたらよいのである。

人間というものは、生死を度外視して、要するに為すべきを為す心構えこそが大切なのだ。」

ということです。

これからお話する物語は、大西信弥が 志信会創設までに歩んできた道のりと志信会の存在意義を問う実話です。

前書き

大西はとても不可解な人物です。
大西信弥と一緒に過ごしていると、
人はいつの間にか（大西信弥の口車に乗せられて？）
夢や理想を語り始めます。そしていつの間にか、
不思議なほど幸せな気分に入っていきます。
大西信弥自身が一番幸せそうではありますが。

大西信弥が一番したいことは困っている人を助けることです。
絶望している人に

「明日があるから大丈夫だよ、明日がだめでも明後日があるよ。」

ってことをわかってもらいたいのだと思います。

人は誰でも悲しいことや苦しいことを経験していきます。
そのとき他人を恨んでしまったり、憎んでしまったりしてしまうかもしれません。
自分自身には価値がないと感じてしまうかもしれません。
そうやって人は少しずつ生きることに疲れたりしながらも、
それになれてしまうものなのかもしれません。

大西信弥は、そんなとき一人じゃないってわからせてくれます。
大西信弥になぜそんなことができるのかというと、
彼はどんな人間も大好きになってしまうからです。
相手に警戒されようが、嫌われようが、
相手にされなかりょうが、関係ありません。
ただ、人が大好きなのです。

他人を愛することは実はとても難しいことだと思います。
愛とは違う感情が生まれてきてしまうからです。

大西信弥にとって、人を愛することは呼吸をすることと同じ位自然で、
きっと人を愛していなければ、生きていくこともできないのだと思います。
こんな不思議な魅力を持つ大西信弥がこれまで歩んで来た軌跡を
【志信会設立前夜】まで、ご紹介させていただきます。

どんなことがあっても生きろ！

どんなことがあっても生きろ！

絶対に自殺はするな！残された人間のことを考えろ

大西が幼少時代から父に諭され続けた言葉です。

「信弥の“信”は、自殺したおれの弟から名付けた」
という事実を 繰り返し、幼い大西に訴えかけていました。
その時は、その意味も分からず、
大西は父の言葉に、ただうなずいていました。

~~~~~半世紀以上も前のある日~~~~~

「兄さん、相談があるのだけれど・・・」  
大西の父の仕事場に悩み事の相談に来た大学生の叔父に

「今、工作中で忙しいから後で手が空いてからな」  
と若き日の大西の父は何気なく答えます。

「いやっ、大した用じゃないから、また来るわ」

そう言って笑みを返した弟の背中を大西の父は、  
ほんの少し引っかかるものを感じながら、見送りました。  
これから待っている仕事を思い  
「じっくり話を聞いてやろう」  
と自分に言い聞かせ、心の中の引っかかりに終止符を打ち、  
仕事に戻っていきました。

「弟が死んだ。」

突然の悲報は、若き日の大西の父が  
その事実を受け止めるにはあまりにも残酷で、  
何度も、「なぜ！」と心の中で叫び続けました。  
今でも大西の父は叔父の生涯を背負いながら、  
2度の癌の手術にも耐え抜き生き続けています。

## 心重ねる

---

大西が中学生になった頃には、深夜ラジオに流れてくる  
「自殺したい」同年代の人達の悩みや、  
自殺のニュースに触れるたび、  
彼らに希望を与えるにはどうすればよいのか悩み続けるようになります。

「来年の今日、同じ時間に同じこの場所で再会しよう。」

こう、約束するだけでも、彼らにほんのわずかな“希望”を与えられるかもしれない。  
そんな思いが日に日に大西の心を支配していく中で、  
それと比例するように自殺を望む人たちに  
出会うことすらできない挫折感もまた、大西を悩ませました。

そんな“生きる”ことを課題に残したまま、大西は思春期を過ごしていきます。



桜の舞う季節、高校生になった大西は、一人の女性と出会います。  
当時、伊丹空港の離発着時の騒音公害で二重窓を施していた校舎で、  
その窓と窓の間に閉じ込める罰則（人間水族館とよばれていました）を編み出した名物先生を  
担任に持った二人の学校生活は、まさに対照的でした。

同級生だった彼女は学年でもトップクラスの優等生で、  
一方の大西はといえば、勉強は大の苦手  
「授業は寝るためにあるもの」と決めつけていた劣等生でした。  
彼女は、国立大学合格を目指して日々勉強に打ち込み、  
その年おこなわれた学力テストでは女子のトップ。



対する大西は「人間水族館」に最速で入館、  
それ以降も人間水族館に放り込まれた数だけで言えば、  
ダントツの成績でした。  
入部したラグビー部も、「奥先輩」の慰留にもかかわらず、  
結局は退部してしまい、人生の明確な目標も見出すことの



できないまま、いたずらに日々だけが過ぎてゆきました。

こんな対照的な二人には、自分に欠けたものを埋めあうように  
お互いの距離を近づけていきました。

そして相手の全てを知り尽くそうとするように、  
思いつくあらゆることについて話題にしました・・・。

やがて、彼女の存在は、大西に生きる価値を与え、  
彼は幸福で包み込まれていくような感覚に満たされていきました。  
このようにして、ゆっくりとお互いを強く求め合うようになった二人の交際は、  
大西にとって彼女を、生涯をかけて守っていきたい、  
かけがえのない存在にしていきました。そして16歳になったばかりの大西は、  
彼女との結婚を約束します。

## 頂点を目指して

---

16歳の夏の日、照り付ける日差しの中で大西は、

「彼女をしあわせにするために、お金を稼ごう！」と思い立ちます。

そして大西はプロゴルファーになるという目標をたて、キャディーのアルバイトを始めます。

そのとき大西は自分の中で何かが変わるのを感じていました。

大西は、ゴルフに対する沸き上がる情熱を抑えることができず、夏休みの間一日も欠かさず、片道1時間を自転車で往復し、ラウンドが終わった後、ボールが見えなくなってもフェアウエーでボールを打ち続け、ゴルフの奥深さに魅せられていきます。

そして大西の生活の全てがゴルフを中心に回っていきました。

一年足らずで、ハーフを30台で回るようになった大西は、17歳でプロゴルフツアー競技

「ヤングライオンズ・トーナメント」の予選会を突破し、数千人の観衆の前で、

有名プロゴルファーたちとのラウンドが決まります。

周りの人たちの賞賛と自分の才能への自信、それを裏付ける練習量、情熱、

これら全てがプロゴルファーになるために準備されていたものと大西は確信していました。

そして初日、中嶋常幸がプロ初優勝を飾ったこの大会に出場した大西は、上位入賞すら夢見ていました。ラウンドが始まるまでは…。



大西は、その日ジェット尾崎とのペアリングでコースを回ります。間近で見たジェットのゴルフは、飛距離、小技、パッティング、プレー中の精神力の強さ、そして絶対的な才能、この全てにおいて大西のゴルフとは、別次元にありました。

「俺のゴルフは大したことない」、練習では埋められない圧倒的な才能の差に、大西の自信は打ち砕かれ、完全な挫折を

味わいました。この現実を受け入れざるを得なかった大西はプロテスト挑戦の夢をあきらめます。

そして高校3年の秋、大西は父に幼少の頃から

「大変な仕事だ。跡継ぎを考える必要はない」

と言われ続けていた清掃業の仕事に就くことを決めます。

この選択は、当時夢をあきらめた大西にとって「彼女をしあわせにする」ことのできる

唯一の選択肢だったのだと思います。

大西にとってゴルフとの1年半は、抑えきれないほどの情熱をぶつけることで、肉体的にも精神的にも成長したはじめての経験でした。そして、屈辱的な挫折がさらに大西を大きく成長させたのだと思います。

ゴルフを捨てることで、大西は人生にとって大きな「何か」を手にいれたのだと思います。

だから、大西にとってゴルフ、そしてゴルフを生み出した英国の文化は特別な存在です。



## 2つの顔の中心にあるもの

高校を卒業した大西は、婚約した彼女との約束を果たすため、  
家業の清掃業に就きます。

入社当時から幹部候補生であった大西は自分自身を律するため、  
あれほど好きだったゴルフを止め、  
3年間無遅刻無欠勤で通しました。

入社当初、将来の幹部の地位が約束されていた大西には、  
冷たい仕打ちが待ち受けていました。  
しかし、大西は決しておごらず、怒らず、毎朝のランニングを決して欠かさず、  
仕事に対しては誠実に、真正面から向き合っていました。

そして現場作業の合間に勉強し、大型免許、  
大型特殊免許、けん引（トレーラー）免許をはじめ、  
フォークリフトの建設系車両の操作や玉  
掛け技能 講習の習得などを取得していきました。

大西の姿勢は、徐々に現場でも認められ、  
3年後には自他ともに認められる幹部候補生に成長していま  
した。  
そして念願だった彼女との結納を正式に果たすことができました。

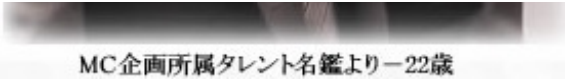


結納を契機に、大西がそれまで押し殺していた  
天性の好奇心が突然心の中にうずき始め、

「新しいことに挑戦したい」

衝動は大きく膨らみ、自分でも  
抑えきれなくなっていました。大西は  
「将来の幹部候補生である自分は、  
人前で堂々と話ができるように  
なることは必須条件」  
という理由を見つけ「話し方」教室に通い始め

「コンプレックスを持っている  
英語を克服するため」



MC企画所属タレント名鑑よりー22歳

英会話学校に通い始めます。

さらに体を鍛えるためにジムに

通い出したのもこの頃から…。

仕事を終えた後、梅田にある「話し方教室」に通い始めて半年、当初のコースを終えた大西は進級テストにパスし、プロ養成コースに進みました。

さらに半年後、アナウンサー養成コースと、タレント養成コースに分かれる際、担当講師から「おまえはタレントに向いている」とおだてられ!?さらに進級していきます。結局、当初 300人以上いた同期生のなかで3人がプロダクション所属となりました。ここまできると、オーディションに受ければギャラが入る仕事にありつけます。

大西が初めて手にした仕事はオロナミンCのスチール撮影でした。わずか数時間で、しかも笑っているだけで10万円のギャラを手にした大西は感激し、殺陣、日舞、ジャズダンスなど、芸事に真剣に打ち込んでいきます。



夢は、恋人と  
恋をかけるためにも。

夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——  
夢は、恋人と恋をかけるためにも。——

気分を変えて

駅でひと飲み。



大塚製薬

—初のCM起用—

## 絶頂、そして

16歳時の時から念願だった彼女との結婚を果たした大西は、

愛に溢れた、本当に幸せな時を過ごしていました。しかし、この幸せな結婚生活は2年後、突然終わりを告げます。子供ができることを楽しみにしていた二人にとって、なかなか子供ができないことが日に日に大きな重圧になっていきました。そして、思い悩んだ挙句、病院で検査を受けることにしました。



それでも、そのときは「原因さえ分かれば対処の仕方はある」と信じていました。しかし大西に告げられた事実は

「突発性無精子症」（当時10万人にひとりもないといわれた症状）で、半年にわたる検査を経てもその原因の特定ができない、完全無精子の状態で、生涯子供に恵まれる可能性は0%という診断でした。

「自分に子供ができない原因があり、  
しかも医学では対処の仕様がなし」  
という事実は、23歳の彼を打ち砕きます。

「このままでは心から子供ができることを  
楽しみにしていた彼女を不幸にしてしまうのではないか」

という思いに取り憑かれ、自分の存在価値にさえ疑問を  
持ち始めてしまった大西は、この時から数年間  
「自分は何のためにこの世に生まれてきたのか？」  
分からなくなってしまう。

「私は子供ができなくても、幸せよ」  
そう妻に語りかけられると余計自分がいたたまれなくなり、大西はその翌年、最愛の妻との別れを決意し、逃げるように逃げるように日本を飛び出し、欧州各国を放浪することになります。



## 欧州へ

大西が最初に目指した渡航先は、かつてプロを目指し心から愛していたゴルフの発祥の地、英国でした。

もっとも初めから“海外”に行こうと思っていたわけではありません。

今の辛さからただただ逃れたくて、言葉や文化、習慣などすべてを変えられる海外に飛び込むことを決めました。

それまで数年間、英会話教室に通い続けていたこともあり、

大西は半年足らずの間に日常会話には、

さほど困らない状態になっていました。この間、本当にたくさんの思い出深い出来事がありました。

なかでも、1984年の初秋、ロンドンの語学学校で、日本でも人気のあったテレサ・テンとクラスメイトとなり、日々、お互いの境遇や日本、アジアについて語りあったことは、今も忘れることが出来ません。

当時はまだ、大西には彼女の憤りの奥底にあったものが分かりませんでした。

でもその後、彼女が命を賭けた政治活動～早逝し、大西が政治に関わることになった今は、少しだけ理解できます。



—テレサと(25歳)—

—26歳の頃—



この頃の大西は、英国の生活習慣に馴染むために街のジムに通い地元の屈強な若者とともにバーベルを持ち上げる日々が続き、ベンチプレスは最高 120kg まで差し上げていました。

ようやく英国での生活にも慣れてきたころ、心に芽生えた“ゆとり”が大西を苦しめはじめました。そして脅迫観念に駆られた大西は、その数週間後、荷物をまとめ英国で知り合った友人を頼って

フランスへ渡っていきます。

## 罪深き者の行き着く先にあるもの

「Bonne Annee（あけましておめでとう）！」  
大西はパリの友人のカウントダウンパーティーに招待されていました。

「日本の新年はどうやって祝うの？」  
「家族と過ごすことが多いかなあ」

日本との慣習の違いが、いっそう日本に残した最愛の妻の面影を呼び起こします。

少しだけ苦い思いが心をよぎりました。

心の中の苦い空洞を埋めるように、精一杯の笑顔で人々の会話の中に入っていました。



1984年冬、記録的な大寒波がヨーロッパ大陸を覆いつくしました。

－20℃まで下がった寒さは、彩られたパリの街の美しさを

一層引き立てます。美しい町並みの地下、メトロ（パリ地下鉄）の構内で、大西は凍死したホームレスを目の当たりにします。

不安の中にしか居場所を見つけられない大西は、暖房のないモンマルトルのアパルトメントの屋根裏部屋に一人で暮らし始めていました。

寒さで凍えてしまう場所でしか、大西は「生きていたい気持ち」を奮い立たせることができなかったのかもしれません。

そして、美しくて残酷な冬のパリの街に自分自身の運命を投影していたのかもしれません。冬のパリでも笑顔をたやさず、

友達からは「いつも楽しそうだね」と言われると

「本当にパリは楽しい」といっていました。

でも大西の“心”の中は、2つの感情に支配されていたように思います。

1つは「自分は生きているだけで罪」という

自らを否定する気持ちと、もう一つは

「なぜ自分だけがこんな目にあわされ続けなければいけないんだ」

という、過去や現在の境遇を恨む気持ちです。

そして、罪の意識からも死の誘惑からも逃れるために、自分自身を振り返る暇の無い生活をすごすことに必死になっていました。

冬のパリで大西は、友達に見せる明るい笑顔の下に隠されたこの感情を忘れ去るためいつも何かと戦っていました。



パリの景色が春の匂いを称え始めたころには、



大西はフランス語を話せるようになっていました。  
パリで暮らしていた4ヶ月の間に  
パリ独特の文化や習慣にもなじんでいました。  
そして、ここでもまた心に生まれた  
「ゆとり」に大西は苦しみ始め、  
自己研鑽に逃避するため、ふたたび街を後にします。

## (続)罪深き者の行き着く先にあるもの

大西が次に向かった先はマドリッド。

スペイン人の情熱や無邪気なやさしさは、なぜか大西が育った関西を思い出させてくれます。スペイン語はフランス語と

とても似ている言葉なので、マドリッドに移住してから数週間がたったころには、スペイン語で現地の人たちとお話をすることもできるようになっていました。

そして、この場所で大西にとって、

とっても大切な瞬間が静かに訪れました。大西によれば、

「オセロの駒が全て裏返っていくような不思議な感覚」

だったそうです。



「なぜスペインに来たの？」

こんな軽い質問から始まりました。

大西は国語教師をしているマルタという女性と、何気ない会話をしていました。

マルタはスペインが情熱の国だからとか、

スペインの歴史に興味があったから、といった理由を

期待していたのかもしれませんが、しかしその質問をされたとき、

大西は正直に、真正面から自分のこれまでの半生を語り始めていました。

「突発性無精子症で子供をつくることができないこと」

「傷つき自分を賣めてヨーロッパに逃げてきたこと」

「それでも日本に残してきた妻をいまでも心から愛していること」

「いき続けていることに罪の意識を感じてしまうこと」

必死に語る大西の姿をゆっくりうなずきながら

静かに聴いてくれていた彼女の目から、突然大粒の涙が溢れ出しました。

言い訳するためでもなく、あわれみを求めるためでもない、

ただ自分の思いを伝えるためだけに発せられた言葉には、

人の心に直接つきささる不思議な力があります。

マルタは大西の心に触れたとき、わけも分からず泣いていたのだと思います。

大西はマルタが涙を流して受け入れてくれたことで、

自分自身を許してあげることができたのだと思います。

それまで、自分が楽しいことやうれしくなることを封印して、

苦しむことでしか安心できなかった大西は

「自分を愛していいよ」と

ささやいてもらったように感じました。



そして、文化や言葉、習慣の違いなんて軽々と超えてしまう、  
普遍的な「愛」の力を信じ始めていました。

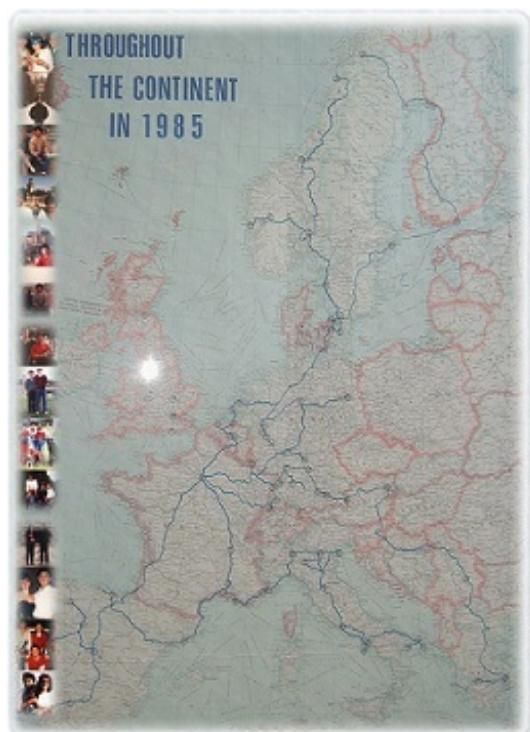


「自分を愛して輝いていきたい」  
そして「人をいとおしい」と強く思い始め、  
「はだかの心で真正面から人を受け止めてみたい」  
という欲望に突き動かされていきます。  
大西はそれまで欧州で出会い、勇気をくれた友だちに  
「自分を見つけたらたずねていく」と約束していました。

## (続々)罪深き者の行き着く先にあるもの

---

大西はこの約束を果たし、「ありがとう」というためにバックパッカーとして欧州全土を旅して回ります。この時訪ねた73都市と友人たちとの再会は、大西にとって一生忘れることの出来ない、大切な思い出です。



## 美しき獣たち

「大西さん、馬はとても繊細な生き物でね、人間の傲慢さや思い上がりが馬にはすぐ分かっちゃうんですよ。それが馬の持っている力を邪魔してしまうんです。」

日本のトップジョッキーに上り詰めた岡部騎手は、ニューマーケットの馬房横ロτζで、ワインを片手に大西に熱く語りかけていました。



1985年夏、大西は競馬の故郷とでも呼ばれる英国中世の街ニューマーケットにいました。大西が最初の渡航先に英国を選んだのは、ゴルフ発祥の地であったことと、競馬発祥の地であったことが大きな理由でした。

1973年に地方競馬から彗星のように突然現れた英雄ハイセイコーがブームになり、大西はサラブレッドの美しさの虜になってしまいました。大西が中学生のころ、週末ごとに宝塚競馬場に自転車で通い、向こう正面から垣間見える「サラブレッドの躍動感」「それを操る華麗な騎手の手綱捌き」大西はそのすべての瞬間を目に焼き付けるように固唾をのんで見つめていました。

大西が19歳するとき、とてつもなく強く、そして美しい一頭のテンポイントという名のサラブレッドが日本のターフを席捲します。この名馬はヨーロッパへの転戦をひかえ、壮行レースで骨折をしてしまいます。そして43日間の闘病の果てに衰弱死というショッキングな最期を迎えます。当時、この事故の光景を目の当たりにしても、大西はテンポイントの復活を信じていました。

テンポイントの死を伝えるニュースに大西はしばらくぼうぜんとし、いたたまれなくなりました。テンポイントの死を受け入れるため、自宅でささやかな葬儀をとりおこなった後、生まれて初めて飛行機に乗って、北海道にあるテンポイントのお墓のお参りに行きました。



大西は、はかなく悲しい、そしてこよなく美しいサラブレッドに魅せられていました。

そして、エプソム競馬場での本場のダービーや、英国王室が一斉に集うアスコット競馬を体験し、  
英国での競馬のステータスの高さを体感した大西は、当時の日本での競馬場の雰囲気や、それを侮蔑するような世間の見方を変えたいと熱望するようになっていました。

そして、ついにシンボリルドルフが日本の競馬界に登場しました。  
大西が日本を後にした1984年から無敵の快進撃を続けた彼は、  
日本競馬史上初めて無敗の三冠馬となり、1985年の春、半年間の英仏遠征を発表しました。

日本の競馬界にとって、この千載一遇のチャンスに大西は  
ニューマーケットの競馬関係者に飛び込みで接触をはかっていきました。  
そして、専門用語や血統、背景に通じる稀有な存在であることを理由に  
通訳として自らを売り込みにかかります。  
そしてある関係者がそのルドルフの主戦騎手だった岡部幸雄氏を紹介してくれたのです。

## （続）美しき獣たち

しかし、ルドルフは、英国で走りませんでした。  
日本での壮行レースを足元の故障で直前に回避した  
ルドルフは、結局、欧州遠征を断念してしまいます。

本来、ルドルフの帯同馬としてやってきた  
シリウスシンボリが岡部騎手と共に「キングジョージ」に  
参戦しましたが、12頭立ての8着と惨敗してしまいます。  
日本産馬が本場で活躍することで日本競馬のステータスを上  
げる夢を持っていた大西にとって、これは、  
完全な敗北でした。



しかし この年、英国内を奔走していた大西は、  
1頭のサラブレッドの置物に出会います。  
躍動感に溢れ、今にも動き出しそうな置物は  
英国の名馬ミルリーフを形どったものでした。  
お店の人から情報を得た大西は、  
この作品を生み出した「ロイヤル・ウースター」を  
訪れました。

1985年当時でさえ、まだ日本人が滅多に訪れることのなかった  
ウースターの地に、その100年以上も前の1872年に  
明治新政府の岩倉使節団一行が訪ねていました。  
ウースター社には、工場で陶磁器の製造工程をつぶさに見学した  
岩倉、大久保、木戸らが 残した署名が残されていました。  
大西は、感激とともに何か因縁めいたものを感じます。



そして、その素晴らしい英国文化を日本に持ち帰り、  
  
日本競馬文化の向上に努めることを決意します。

※その後、大西はニューヨークに飛び、アメリカ大陸を横断した後、  
ハワイを経由して帰国するに至ります。

放浪の間、彼は自分自身に「なぜ生まれてきたのか」を問い続け、「自らに与えられた使命」を追いかけ続けていました。

約2年の間、欧州・米国での生活の終わりに、  
彼は“この世に生まれた意味”は、  
自分自身の生き様でしか残すことができないという  
非常にシンプルですが、向き合うことに勇気のいる結論に  
いたりします。

突発性無精子症の告知からこの結論に至るまで、  
本当に真正面からこの事実を受け入れるには、  
大西は約3年という時間と、様々な国の人々に会い、  
国籍を超えて普遍的な価値観に触れる必要がありました。

そして、大西は一番大切な“幸福”を失ったことで、  
人生に立ち向かうチャンスを手に入れることができたのだと思います。



## 笑顔の中に隠されたもの

---

「おかえりなさい」

「えっ！・・・」

夢を見つけ日本に帰国した大西を、  
別れたはずの妻が大西の実家で待っていました。  
大西は勝手に欧州に逃げていった自分を  
2年間も待っていた妻がいとしくて、涙を流していました。



「なんで、ここで待ってたんや？」

「ここが私の家だから」

大西は妻との生活を再び始めます。  
しかし、大西と妻との関係は以前のままではありませんでした。

「あの大西君がねえ〜。」

彼女は冗談交じりで、笑顔で大西に語りかけます。  
妻の知っている大西は、勉強が大嫌いで、特に英語は一番苦手な科目でした。  
ヨーロッパから帰国した大西は、電話で外国人と英語でやり取りをし、  
フランス語やスペイン語も日常生活には困らないぐらい話せるようになっていました。  
大西はその冗談の中に、妻の感情を感じ取ります。  
もしかしたら、その前から感じていたのかもしれませんが。

「彼女は、自分を取り残されてしまっているように感じている・・・」

大西は、彼女の笑顔の中に、夢への焦りと諦めの間で  
行ったり来たりしている想いを感じとります。  
大西はそんな妻の感情を思うと  
「このままで良いのか？本当に俺といることが彼女にとって幸せなんだろうか？」  
と悩みはじめます。



「海外に行ってみたいんか？」

大西は切り出します。

「うん。」



「そうか。それなら、行ってこい！」

「ありがとうね。」

「もう戻ってきたらあかんよ」

「わかってる」

2人の間にはこれ以上の言葉はいりませんでした。

このまま、彼女を失うことは分かっているけど、  
大西にはこれ以外の選択肢は無かったのだと思います。

本当に愛しているから、彼女の夢を知っているから、  
今度は大西が彼女を送り出すことができたのだと思います。

そして大西は、彼女が自分を待っていてくれた2年間  
彼女には何も言わず待つことを決めます。

大西はその時、戻ってこないで欲しいと本当に思っていました。

戻ってくるとしたら、彼女の夢が破れた時だから、  
そして大西は彼女のことを心から愛していたから。

彼女は大西の元には戻ってくることはありませんでした。

でも海外で再婚し、子供を育てながら幸せに暮らす彼女を  
そして彼女の家族は大西にとっての自慢です。

## 皇帝ルドルフに魅せられた男たち

---

「日本には、シンボリルドルフという  
素晴らしい名馬がいます。」

ロイヤル・ウースター社の会議室で大西は話始めました。

「この名馬をロイヤル・ウースター社で  
オーナメントにしてください。  
私がロイヤル・ウースター社のオーナメントを  
日本に広めますから！」

「それで、君には何ができるんだい？」  
「・・・」

「ロイヤル・ウースターの商品を広めることは難しい。  
我々は 250年という時間を掛けてロイヤル・ウースターの伝統と歴史を築き、  
英国の文化の一部として認められてきた。  
君には、サザビーのようなオークションハウスで取引されるような  
コレクションを取引してきた経験もなければ、日本の競馬会との太いコネクションもない。  
やめておきなさい。」



たった一人で訪れて、いきなり

「商品をつくってください！」

と言い出した25歳の日本人を目の前にして、  
ロイヤル・ウースター社の担当者も  
きっとびっくりしていたでしょう。  
大西も簡単に商品が作ってもらえるとは、  
思っていなかったのが、一旦はそのまま帰っていきました。

大西は、ヨーロッパを放浪しているちょうどそのときに、  
活躍を始めたシンボリルドルフに自分の運命を重ねていました。そして、シン  
ボリルドルフをオーナメントにすることが  
”自分の運命”だと信じていた大西は、  
断られてもどうしても諦めることができませんでした。

そして、大西は何度もロイヤル・ウースター社に足を運び、

「日本の競馬のステータスを上げたい！」と必死に訴えかけました。

一生懸命な大西に、ロイヤルウースターの担当者たちが

次第に共感し始め味方についてくれました。

断られても断られても笑顔でやってきて、

日本の競馬の将来やロイヤル・ウースターの魅力を語る若者に

冒険心をくすぐられたのかもしれません。

どうにかシンボリルドルフをロイヤル・ウースターのオーナーメントにする契約を取り付け帰国

すると、

大西は 早速シンボリルドルフの関係者に連絡を取り始めます。

「英国王室御用達メーカーが、日本の 生んだ名馬をモデルにしてくれるのです。」

と説明しましたが誰も 相手にしてくれませんでした。

予想はしていましたが、誰も振り向いてくれない悔しさに、大西は何度も心が折れそうになります。

そんな時大西は、生きる意味を失って渡欧し、必死に自分を探し続けていた生々しい記憶を思い出していました。

## (続)皇帝ルドルフに魅せられた男たち

そんな時、相手にされていないのに、何度も何度もやってきては、同じ夢を語り続ける大西の姿に心を動かされた一人の調教師がいました。その調教師さんは「野平祐二」と言います。

元スター騎手で、大西が出会った 1986 年当時 ” ミスター ” の愛称で親しまれていました。

ミスターは調教師として日本史上最強馬シンボリルドルフを育てた名伯楽です。ミスターは夢を諦めない大西の姿に感動し、全面的なサポートを約束します。

シンボリルドルフのオーナメントを作るためには、馬主さんに許してもらわないといけないのですが、シンボリルドルフの馬主さんは、なかなか「よしっ!」といっってはくれません。シンボリルドルフを心から愛していた馬主さんは、シンボリルドルフはこの世界で一頭だけの馬で、オーナメントが沢山作られてしまうことは裏切ってしまうようで嫌だったのです。この様な状況で、調教師さんがサポートしてくれることは、大西にとってとても大きな味方をつけたことになります。



「大西さん、ルドルフはね、レースでは大胆で圧倒的に強いから、ふてぶてしいと思われているけどね、本当は、とっても繊細な子なんだよ。レースの前はいつも緊張してね  
誰も近づけない。ぼくでさえ、柱の陰からそっと様子を見てるんだよ。」

ミスターの言葉に、大西のルドルフへの想いはますます強くなります。そして、勇気付けられます。大西は、他人から見られる大胆な自分と自分自身で痛いほど感じている「線の細い自分」の間でゆれていました。

以前は、そんな「線の細い自分」を隠すことで一人の男としての誇りを保っていました。ルドルフの本当の姿を大西にお話してくれたミスターは大西の中にルドルフの繊細さをみたのだと思います。

大西は「線の細い自分」を認めることをルドルフに教えられたように感じていました。

ルドルフへの想いが強くなるにつれ、大西は徐々に、大西が知らないところでも周りの人たちを巻き込んでいきました。ミスターは大西の夢を実現するために、自らの地位や名誉を掛けます。

「大西君、ルドルフのモデルを作りなさい。後はすべてぼくが責任を取るから。」

大西はルドルフのプロトタイプの製作をロイヤル・ウースター社に依頼します。そして、最後には馬主さんから、ようやくモデル化の許可を得ることができました。

「シンボリルドルフ」がロイヤル・ウースター社製のオーナメントになり世界販売されるまでには、2年もの歳月がたっていました。この間、ルドルフは宝塚記念での怪我を完治させ再び快進撃を始め、一度は断念した欧州遠征が決まります。

しかし、その前哨戦として選んだアメリカのレースで故障し、欧州遠征も結



局諦めなければなりませんでした。そのレースにも大西は夢をかけて立ち会っていましたが、再びの断念にやりきれない思いをどこにもぶつけることができませんでした。



野平調教師と大西は、2001年に野平調教師が亡くなられるまでの15年間、実の親子のような関係が続けました。

野平調教師は自分を「祐ちゃん」と呼ばせ、会うたびに

「大西さん、いつでも『夢は限りなく、』っね！」

といってウィンクをして、大西に勇気を与えてくれました。

（野平調教師の直筆による「夢は限りなく」の色紙は、会の本部に掲げられています。）

## 決意

大西は、ルドルフのプロトタイプ ( 試作品 ) をもって、  
有名百貨店に営業を開始しました。

ここでも最初は全く相手にしてもらえませんでした。

しかし、その時ちょうど バブル経済が始まり、  
より高価なモノ、より希少なモノが投機の対象として  
雪だるま式に価値があがっていきました。

ロイヤル・ウースターに注目する人々も少しずつ増えてきました。

そして、日本の大手商社等が日本総代理店契約を得るために

頻繁にロイヤル・ウースター社を訪れるようになります。

当時、大西がロイヤル・ウースター社と交わしていた契約はシンボリルドルフを製作、販売する権利でした。



当時日本の商社は頭脳と資金、情報を握っていた

エリート企業で、真っ向から総代理店契約の

争奪戦を戦うには大きな決断が必要でした。

迷っていた大西は、当時コップ一杯のビールですら飲まない

お酒を毎日のように飲んでいました。

それでも悩み、何かのきっかけをつかむため、渡欧以来むさぼるように読んでいた  
本からヒントを得ようとしています。



そして、司馬遼太郎の「竜馬が行く」に出くわします。

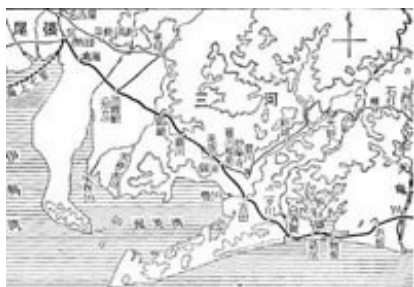
そして酔っ払った勢いで、東京都渋谷区 から歩いて

京に上ることを宣言します。

「弥太郎が丸 3 日で京にたどりついた

と記されているが、実際のところ、どんなものか？」

試してみたかったようです。



2月の中旬、一年で一番寒い季節にはじめてしまったため、

厚着をし、半日もすると膝に痛みが芽生え始め、

箱根峠に差し掛かった頃には、

雪で「石畳の風情」どころではなく命が危ない

と感じるほどでした。

結局、伏見の寺田屋にたどりついたのは

東京を出て 10 日目のこと。



その夜、竜馬がいつも愛用していたといわれる

「梅の間」に泊れることになりました。

大西は何を勘違いしたのか、

「竜馬先生が夢枕に現れるに違いない」

と信じワクワクしながら床に就きました。



久しぶりの畳の寢床に、大西は意識を失って泥のように寝むりこけてしまいました。

「あれっ!?!、朝や…。なんで竜馬先生は起こしてくれなかったんや!」  
「俺は竜馬先生の生まれ変わりやないんか 〜?」

大西の落胆は尋常ではなかったようです。  
だれに言われたわけでもなく、  
自分が坂本竜馬の生まれ変わりだと信じ、  
「寺田屋で会うことができる」  
と疑いもなく信じこめる大西は、普通の人の感覚とは  
ちょっと違うようです。

もう一日かけて兵庫の実家にたどり着いたとき、  
両足裏はボロボロで足全体も異常に腫れ上がっていました。  
しかし、東京から兵庫まで歩き続けたお陰で、  
大西の決心は固まります。

「人生、やりたいことをやらなきゃ、絶対後悔する」

という真実を悟った大西は商社やロイヤル・ウースターと  
思いっきりやりあってみよう!と決意します。





決心をすると普通の人では追いつけないスピードで進めてしまうのは、このころも今も変わらない大西の特徴です。

あっという間にロイヤル・ウースターの経営陣と信頼関係を構築し、早速日本に招待してしまいます。

そこで、家業で普段はやったことのない経営会議の風景を ロイヤル・ウースターの経営陣に見せ付けます。

また、総代理店の保証金をメーカーが要求したその場で用意し、支払いの手続きを済ませてしまいます。

大西の情熱とスピードは商社を圧倒し、ロイヤル・ウースターの経営陣は、大西と日本総輸入代理店契約を締結します。



大西はこの勢いに加速をつけ、百貨店バイヤーの要求に応えられるよう、欧州の友人たちのネットワークを活用し、英国・スコットランドの至宝「エジンバラ・クリスタル」社やスペインの陶磁器メーカー「レックス」社、イタリアのシルバーウエア「チネリ」社らとの間で、次々に総輸入販売代理店契約を結んでいきます。

大西は、ブランドを確立するには多くの時間と資金が必要なことを承知で、日本では知名度は低いが、本物の逸品を探し求め、さらに銀食器メーカーの英国王室御用達「アーサープライス」社との契約や、英国王立彫刻家協会に選出されたケネス・ポッツ氏の代理人契約を結んでいきます。

東は仙台三越、西は福岡岩田屋まで、そのとき広げた販路は有名百貨店の直口座開設だけでも50店舗を超えていました。

名馬シリーズ第一弾として、競馬番組や雑誌、新聞などで大きく紹介された「シンボルドルフ」に続き、TBSの世界の逸品を紹介するテレビ番組を仕掛け、キャスターの森本毅郎氏ら取材班とともにウースター社で撮影～放映も行っていきます。

また「オグリキャップ」のオーナーに直談判して、何度となく名古屋に足を運んだ結果、



シリーズ第二弾の製作を手がけることになりました。

ちなみにオグリキャップのオーナーから聞いた話では、当時、爆発的なブームを巻き起こした「オグリキャップのぬいぐるみ」は、オーナー自身が大西の情熱とこの陶磁器置物からヒントを得て世に送り出した商品だったそうです。

そして、ロイヤル・ウースター、英国王室御用達「オグリキャップ」オーナメントが発表されたのが翌 1990 年、まさにバブル絶頂期のことでした。

当時のフジ TV の人気番組で取り上げられ、女優の岩崎良美さんとともに英国に飛び、ウースター社とオグリキャップの製作過程を撮影、そのご縁で大西と彼女は、日本に帰国後も舞台等を観劇した後、食事をともにする間柄にもなっていたそうです。

# 無力

---

クリスマスを過ぎると、街はイルミネーションを替え、年の終わりを惜しむ様な慌しさと、何かを失っていく寂しさに包まれていきます。欧米放浪から6年、1991年の暮れは、大西にとって特別この想いを強くすることになりました。



「兄さん、相談があるのだけど」

その日、大西を訪ねてきた義理の弟は学生時代からの友人で、10年以上の付き合いがありました。

彼は、学生時代から音楽を愛し、百貨店に就職した後も充実した生活を過ごしていました。

少なくとも大西にはそう見えていました。

この義弟は、大西が妻との離婚を報告しに、妹夫婦の新居を訪れた時にも

「お兄ちゃん達は夫婦を超えた関係になるということやね」

と、多くの人たちが反対するなかで、大西の想いを理解し優しく受け止めてくれました。



「この正月三が日は、  
とことんまで付き合うから」  
大西は精一杯、訴えかけていました。

4時間にわたり語り合い、それでも時間を惜しむ彼の表情  
に大西は

「違和感」を感じていました。  
「ありがとう。泊まる用意をして  
戻ってくるから…」  
これが彼との最後の会話になりました。

「結局、俺は何も変えることができなかった。

俺はなんて無力なんだ・・・。」

大西は自分自身に言葉を叩きつけながら一人、泣きました。

残された大西の妹は、まだ小学校にも上がっていない子供たちを抱えて、

そのとき気丈に振舞っていました。

「自ら命を絶った彼の悩みは、今も分からない」

大西は静かに語りを終えました。

「生きろ！絶対に自殺はするな！残された人間のことを考えろ」

父から受け継いだこの言葉は、大西の中で揺るぎようのない真実で、  
亡くなった弟には、どんなことをしてでも伝えたかったことです。

そして、中学生のころから、

「父のくやしさを誰にも味あわせたくない」

と願っていた大西は、この時初めて自分自身が父のくやしさを知りました。

## 悲しい笑顔

---

1986年から 1991年までの 5年間、日本の経済は今とは比べ物にならないくらい強くて、

「ジャパン・アズ・ナンバー 1」という言葉が当たり前のように使われていました。

大西はこの 5年間、東京での会社設立、欧州有名ブランド各社との輸入販売契約、全国有名百貨店での販売、テレビでのロイヤル・ウースター特集番組企画と次々に不可能を可能にしてきました。

思い通りに物事が進んでいきました。しかし、突然訪れたバブル経済崩壊の波は、大西の夢をかけた事業を簡単に飲み込んでいきます。

「売上が急激に落ちています。社長、このままではもちませんよ！」

「大丈夫だよ。」

大西は笑顔で答えていました。しかし、大西は決断を迫られていました。

弟の死はそんな時に起こった事件でした。大西は、弟の死に「続けること」の大切さに改めて気づかされたのかもしれませんが。大西は、業務縮小と東京から芦屋への本社移転を決定します。

それでも大西は、メーカーの期待に必死にこたえようとしていました。

「ブランドも、巨額の資金もコネクションさえもない、

たった一人でやってきたドンキホーテのような

自分をロイヤル・ウースターは信じてくれたんだ。」

大西は時々襲ってくる不安と必死に戦っていました。そして英国の本社とタイアップした

「ロイヤル・ウースター」ショップ日本第一号店を芦屋にオープンさせました。



東京から兵庫まで自分を信じてついてきてくれたスタッフを鼓舞するため、

大西は朝3時半に起床し、新聞配達を行った後、昼は家業の現場作業に従事、

夜は芦屋のウースターショップに向かうという日々をすごしていました。

そして、この時期 一人の少女に出会います。

彼女は、どんな事があっても明るい笑顔を絶やすことのない美しい女性でした。

大西は、彼女の笑顔の中に「悲しみ」を感じ取ります。

彼女がいつも見せていた笑顔は、大西が欧州で

いつも見せていたのと同じ笑顔でした。



大西は彼女のその笑顔に触れるたび「彼女を大きな愛で支えてあげたい」と  
思いはじめました。

世界名作劇場「私のあしながおじさん（放映 1990 年 1 月～）」に  
感銘を受けていた大西は、主人公を支え続けた「あしながおじさん」と  
自分を重ねあわせて、いつも山高帽をかぶり彼女を支えています。



そして、年齢がひとまわりも違うこの少女と結ばれることになります。  
その時、大西は、まだ大西自身が「悲しい笑顔」を見せていることに気づいてはいませんでした。  
彼女は、大西が新聞配達から帰ってくる午前5時30分にはいつも朝食を用意し、  
現場作業に出掛ける夫のため、手の込んだお弁当を毎日持たせてくれました。

大西は彼女を心から愛していました。しかし、その愛は男女の対等な関係ではなく  
“あしながおじさんの愛”だったのかもしれない。  
愛を彼女に注ぎ続けることで、大西は失ってしまった大切なものを求め、  
空虚感を埋めようとし続けていました。  
どうしようもないほど深く傷つきながら、それでも愛を与え続けてくれる大西に、  
彼女もまた必死に答えようとしていました。

## 衝撃

1995年1月17日午前5時46分、

突然の衝撃が大西を襲いました。

大西は、揺れがおさまるまで何が起こったのかですら理解することができませんでした。

「ノストラダムスの大予言が当たってしまった...」

大西はつぶやいていました。 半壊したマンションを駆け下りた大西は、目の前に広がる光景に地獄をみていました。

「阪神・淡路大震災」による壊滅的な被害が広範囲に広がっていると知ると、大西はじっとしていることができませんでした。ウースターの作品群が大きなダメージを被っているのはわかっていても、抑えることはできませんでした。

大西の当時の自宅には、シンボリルドルフのオーナメント (スタンダード・エディション) が飾ってあったのですが、この地震で5メートルも飛ばされても、無傷で立っていました。大西はそのシンボリルドルフが「何があっても大丈夫だから」と、大西を後押ししてくれているように感じていました。そして、地震の翌々日から大西は、家業 ( 清掃業 ) の経営者で組織されたボランティア活動を率いて、



被害の大きな地域に足を踏み入れていました。

避難所の既設トイレは断水の影響で利用できる状態ではありませんでした。被災者の多くは地面に掘った穴を便所として利用していて、若い女性も友人たちにタオルや戸板などで衝立をしてもら

いながら用を足さなくてはなりません。大西たちは 汚物を汲み取り、処理後に石灰を撒く作業を毎日続けていました。

大西が担当した 神戸市東灘区と 芦屋市 では、跡形もなく崩れ去った家屋が続いていました。そして避難所になっていた体育館には、まだ白い布で覆われた数多くの遺体が安置されていました。手を合わせながら、「貴方達の分まで生きる」と誓った日を、大西は心に深く刻み付け「絶対に忘れない」と言います。





初動期に自衛隊投入を決断できず、  
そのことで数百人の命が失われた事実は  
「政治判断」が「人間力に左右される」  
という事実を大西に突きつけました。

そして、大西は「自分に何ができるのか？」を自問し、その問いに苦しみはじめます。  
亡くなった方への鎮魂として、この年の秋に福知山マラソンを完走しますが  
「自分には何ができるのか？」の問いの答えにはなりえませんでした。

大西はこの問いの答えを求めて、各業界団体や地元での会合などに  
積極的に参加するようになります。

そして、ボランティアで絆を深めた兵庫県下の清掃業に従事する2世を中心に青年部を発足させ、  
初代青年部長に就任、翌年には行政当局の要請により、阪神間の異業種メンバーで構成された  
優良納税事業者の青年部を設立し、組織を率いていくことになります。

## かごのなかの鳥

「わたし、欧米で勉強したいの・・・」  
口いっぱいに苦味が広がり、心がつぶれて  
芯の部分が締め付けられるような痛みを  
大西はかんじていました。  
それでも大西は答えます。

「そうか。それなら、行ってこい！」  
「ありがとうね。」  
「もう戻ってきたらあかんよ」  
「わかってる」



震災から数週間後、まるで、一度目の結婚の結末を  
ビデオ再生しているような感覚に大西はとらわれていました。  
震災を経験した彼女は、「生きる」ことを選びました。

「ただ笑って、となりに座ってくれているだけでいいから...」

ヨーロッパからのお客様をお迎えする時、大西は決まって彼女に、  
“労わりの言葉”をかけていました。  
彼女は大西に従い、食事の間ずっと微笑み続けていました。  
彼女は愚痴一つ言わず「楽しかった」と大西に微笑みながら感想を話していました。

しかし、その微笑は出会った頃みせていた  
「悲しい笑顔」だったことに大西は気づきませんでした。

「何と残酷なことを強いていたんだろう」

彼女の苦しさを思い出すと大西は、今でも悲しくて、恥ずかしくて、涙が出ます。  
大西は彼女を守ることで、自分自身もかごの中にいて安心できていたのかもしれませんが。



彼女の決意は、  
「悔いを残さないために」  
大西のかごの中から、飛び立つ瞬間でした。そして、大西  
はその後3年間で  
全力で彼女の自由をサポートします。

英語、フランス語をみごとに習得した彼女は、今、やさしい



夫と子供と一緒に、静かな幸せの中に暮らしています。

「男として大きくふるまっていたつもりで、実のところ傷つくことがこわかったんだね。  
二人とも、それを痛いほど分っていたし、結局、俺が彼女たちに守られていたんだ。  
彼女たちも本当に欧米に興味はあったのだろうけど、  
そこで生まれかえった自分の思いをわかってもらいたくて、  
知らず知らずのうちに、行くように仕向けたのかも知れない。  
縁あって、今もその愛妻二人が地球の裏で友情を育んでくれている。  
なんて素敵なことなんだろう。」

大西は、愛した二人の妻を振り返って語ってくれました。

## ミスター、逝く

震災により、ウースターの作品群は甚大な被害を受けていました。

それでも大西は夢を諦めきれず

「ウースターブランドと競馬文化の確立」を目指して走り続けていました。

名馬シリーズは震災前年に発表した第三弾のトウカイテイオーに続き、三冠馬のナリタブライアン（1997年）、そして欧州 GⅠに勝利し、凱旋門賞で2着入賞を果たしたエルコンドルパサー（2000年）と続けていきました。



大西は、日本屈指の馬主さんを相手に、コネクションも無いところから制作を了解させ、最後には製作最低ロットの買い取りまで要求してしまいます。

だから、大西に見込まれた馬主さんたちは「大西信弥とその被害者の会」の先輩です。

「あの頃は、大きくは日本競馬文化の向上に資すること、小さくはその名馬が地球の裏側で博物館に展示される誉れを創造することが、自らが生き続けることのできる使命と思い込んでいた」

と大西は、大西らしい都合の良い解釈で、全く疑問も持たず次々に日本の名馬のオーナメントを生み出していました。



「先生のご恩に報いる為にも、ウースター社のオーナメントを通じ、日本競馬文化の向上に努めてまいりましたが、これでやっとひとつのケジメがつきました。」

1999年のフランス凱旋門賞で僅差の2着と

善戦したエルコンドルパサーを、大西は

ミスター（野平調教師）と一緒に、スタンドで応援していました。

そして、ロンシャンのスタンドを埋め尽くした大観衆が拍手と歓声で彼を迎えたのを目の当たりにした大西は、

達成感と虚脱感の中で大粒の涙を流していました。

あのテンポイントの死去からすでに 20年以上の時間が過ぎ、英国・アスコットで味わった屈辱的な嘲笑や、アメリカでのルドルフに対する大ブーイングなどが現れては、消えていきました。

調教師定年を数ヶ月後にひかえた

ミスターも、

「ようやくここまできたね」

と、同じように喜びと寂しさの

混ざった表情を

大西に返していました。

この日から約2年後、2001年8月6日、

野平祐二先生は天に召されました。

通夜、告別式に駆けつけた大西は、棺に横たわるミスターに、大西の人生を変える新たな決意を伝えました。



豪腕、そして・・・

自分の地位や名誉をかけて大西の夢を守り、  
それでもいつも茶目っ気たっぷりの笑顔とウィンクで  
周りを勇気付けるミスター（野平調教師）の生き方は、本当にかっこよく、  
大西はミスターを父のように慕っていました。

「祐ちゃんが・・・」

野平調教師の奥さんから連絡を受けた大西は、  
新大阪から飛び乗った新幹線の中で、  
鏡に写し出された血の気のない  
自分の顔を洗いながら、涙を隠していました。  
そして、席に戻ろうと顔を上げた大西は、

「大西さん、夢は限りなく、ねっ」



というミスターの声を聞いたように思いました。  
その“声”に呼応するように大西は、ミスターに聞いてもらいたかった決意に思いをめぐらします。

欧州を放浪していたころ、大西は日本語に飢え、日本の書籍を扱う古書店で  
買い込んだ本を自分でも信じられないほど熱中して読んでいました。  
特に坂本龍馬や高杉晋作、ウースター社で直筆のサインを目の当たりにした  
大久保利通や木戸孝允など幕末の志士たちの活躍に、大西は体温が上昇するほど興奮し、  
“運命”を感じます。なぜ運命を感じるのかは、なぜですが・・・。

それでも、大西は現実の政治に、興味はもっていませんでした。  
なにしろ大西自身は、政治家と接点を持つことなど想像したこともなかったのです。

弘兼憲史氏と。名作『加治隆介の譚』の登場人物ならびに  
政策のモデルは小沢一郎氏だった。



1993年、細川護熙氏を擁立した連立政権が成立します。テレビに映し出された自民党一党支配の体制が崩壊していく様子に大西は目が離せなくなります。

颯爽と登場した連立政権の首脳陣は美しく、  
まるで巨船の進水式のようなものでした。  
この美しい船を建造したのは、小沢一郎代議士です。  
連立政権成立の数ヶ月前、大西は小沢一郎代議士の  
著した「日本改造計画」を読みました。

政治家の書いた本の中で、「日本改造計画」は、大西にとって初めて読

んだ本だったのです。

話題になっていたこともあり、手に取ったのですが、

小沢氏がグランドキャニオンに柵すらない状況を見たとき、

日本人の「安全を守ってもらって当然」という姿勢と

アメリカ人の「自分の安全は自分で守って当然」

という「意識の違い」に驚き、日本が全世界で民主国家として自立していくためには、

日本人一人ひとりが個人として自己の確立をすることが必要である、

と提言している「まえがき」を読んで大西は惹きこまれていきました。

## (続)豪腕、そして・・・

このまえがきは、大西がグランドキャニオンを訪れたときの感覚を的確に表現してくれていたのです。「日本改造計画」は、

「国民の代表である政治家が官僚をコントロールする政治にしなければならない。社会のルールを明確にして国の恣意的行政、不透明感をなくし、個人を大切にする自由な社会にしよう」

という想いが貫かれていて、具体的に国のあり方についての骨格まで示されている名著だ！と大西は感銘を受けていました。

そして、その数ヵ月後、小沢氏は連立政権を樹立してしまうのです。

「小沢さんは凄いなあ・・・」。

著書にある政治理念を断行するため、自民党の中枢にいる人が自民党を飛び出し、首班指名では全国民を驚かし、細川政権を誕生させてしまいました。大西は、はじめて現実の政治のなかに、湧き上がってくる興奮を覚えていました。この美しい船の中枢に、小池百合子氏はたっていたのです。

「英語が上手な人だなあ～」

ワールドビジネスサテライトで流暢な英語を駆使する才色兼備の女性キャスターが、政治の現場に飛び込んでいくとは思っていただけに、政治の動向から目が離せなくなりはじめていきました。

ところが、全国民が期待を寄せたこの華麗な政権は8ヶ月で崩壊し、その後、少数与党で発足した羽田内閣はわずか64日で終止符が打れます。その後「ありえない」はずの社会党と自民党が連立を組んだ村山政権が誕生しました。そして村山政権成立の半年後、大西はあの阪神淡路大震災で罹災することになります。



この連立政権は、本当の危機に対応することはできませんでした。

期待していた新進党も 1997年の暮れには

内部分裂により解散してしまいます。

その後、小沢一郎氏は自由党を旗揚げし、

小池百合子氏も小沢氏と共に自由党に入党します。

しかし、自由党はこの時点で衆議院議員が50人に満たない小政党となっていました。それでも大西は、この自由党にかすかな望みを託していました

。



「現実の政治なんてこんなものか・・・」

大西が抱いていた政治に対する「期待」は、

数え切れないほどの死と向き合い、

「生きる」ことを誓った震災体験とともに「失望」へと変わっていました。

それでも心のどこかで、未だに政治への期待と失望が

葛藤していました。そんなときに妻と別れ、大西は自分自身では

どうすることもできない苛立ちに悩まされ、

「自分一人でいったい何が出来るとだろう」と、

悶々とした日々を過ごしていました。



そんなとき、大西は一人の女性と出会います。

彼女は実父の会社で勤めていたのですが、

いつも凛として仕事も周りへの配慮も完璧にこなす

美しい女性でした。しかし、彼女は自らを殺して

生きている自分に疑問を持ち、

「生きる」ことを肯定しきれないでいました。



大西は彼女の中にある深い悲しみを知り、

それでも常にひたむきな姿に本当の強さを見ていました。そして彼女もまた、

大西の深い悲しみと、真理を求める強靱な精神に触れて、自分自身の価値観が少しずつ変わっていくのを感じていました。

知らず知らずのうちに大西は、彼女が本当の自分をさらけ出すことができる唯一の女性であることに気づき始めていました。

大西はこのとき、自分に欠けていたピースが彼女によって

埋められていく様な不思議な感覚に包まれ、2人で1つになると確信していき

ました。そして、大西は彼女と結婚し、ようやく求め続けていた

人生のパートナーを得ることができました。



1990年、オグリキャップと



1980年、五冠馬シンザンと



1998年、愛犬オペラと



## 本物の匂い

「小池百合子さんをゲストに招けないだろうか・・・」

大西は当時、優良納税事業者の青年部の部長を務めていたのですが、その役員会でひとりの役員の何気ないひとことに、大西は高揚感を覚えます。



すぐに、事務局を通して代議士事務所に連絡を入れ、小池百合子代議士との面談にこぎつけました。地元でいろいろな団体に所属していても、

どこか浮いた存在だった大西は、小池代議士と出会い、不思議なほどほっとした気分を味わうことができました。共通点が多く価値観がとても似ていたのです。

大西も小池代議士も、大阪・神戸の狭間、阪神間で生まれ育ち、関西ことばをベースにしながら、長期間の海外生活、若くしての結婚～離婚体験を経て、東京での生活にも順応してきた二人は、“同じ匂い”のようなものを感じとっていたのかも知れません。

「小沢さんは誤解されることも多いけれど、本当に正直で尊敬に値する政治家よ」

小池代議士の言葉に大西はとても感激していました。

小池代議士の価値観はとても自由で、これまでの政治家のものとは全く別世界のものです。特に印象的なエピソードをひとつあげるなら「先生と読んだら罰金500円」という募金箱です。秘書や記者、後援者の方々にさえ、うっかり「先生」と呼んでしまった場合、自主的にワンコインを投じることになっています。

小池代議士が醸し出す、これまでお会いしてきた政治家（屋）さんとは全く違った雰囲気到大西は感激しつつも、



「もしかして、この募金箱は地元でのパフォーマンス？」という疑問も払拭できず、仕事で上京した際に、いきなり議員会館を訪れます。（本人が納得いくまで徹底的するのが、大西です・・・）

結局、ここにも「あの募金箱！」がありました。こちらでは、官僚からも募金を募っているのだそうです。

。

「こりゃあ本物だ・・・。」

さらに数回の打ち合わせを経て、正式にゲストとして招いた講演会で、集まったメンバーたちを魅了し、執行部役員で催した二次会でも気さくに振舞う小池代議士に、

大西は「これから何かが始まる」という予感と期待に胸をときめかせていました。

その後、大西は小池さん（そんな経緯もあり、この頃から  
こう呼び始めていました）を自宅に招き、今後について  
じっくりと話し合いました。

当時、小池さんの願いは、自らを支援することの出来る  
保守系若手経営者の組織化でした。

「わかりました。」



自宅を後にする小池さんを見送りながら、大西は早速、  
具体的構想を練り、翌日には行動に移していました。

その後、2度のミーティングを主宰、阪神地区の若手経営者と小池さんを招きました。

## 覚醒

---

「政治であなたは何を変えられますか？」  
「そういうあなた方こそ何ができるのよ !!」

2度目の会合の 質疑応答の場面、メンバーのひとりが発した質問への 小池さんの返答は、それまでの長い挫折の中で「自分の使命」を模索し続けていた大西にとって、まさにカミナリに打たれたような衝撃でした。  
この瞬間まで、東奔西走していた大西自身でさえ、小池百合子のために組織を作ってやっている、という発想が奥底に潜んでいた事を思い知らされました。

「Ask not what your country can do for you .

Ask what you can do for your country.」

（国が何をしてくれるかではなく、  
諸君が国のために何ができるかを自問してほしい）

鮮烈な響きと感銘を全世界に与えた若きアメリカのリーダー、  
J・F・ケネディの演説が今、大西の中でリアルに動き出しました。

大西の中で、国が「何をしてくれる？」という受動的な発想から、国のために  
「何ができる？」を自分に問いかける能動的発想に、  
思考の出発点が変わってしまったのです。

このことばを境にして、大西のなかですべての事柄が、大きく動いていくことになります。

「“世のため、人のため”は何のことはない、“自分のため”にすることなのに、  
そんな簡単なことを理解するのに 40年近くかかってしまった。」

大西は笑いながら話します。それが大西にとって、どれだけ大きな衝撃だったかは  
今後の物語でお話していきます。

大西のミッションは明確なものになりました。

「我らが郷土を代表する、素晴らしい理念を 持った政治家・小池さんを支えることにより、  
この国の未来のためにつくす！...。」

「祐ちゃん、やっと見つけたんだ。  
人生を賭けて自分がすべきことが。  
この国を自立させようと思っているんだ。」



40年もかかってしまったけど、  
限りなくでっかい夢でしょ。  
生きているうちに  
叶わないかもしれないけど、  
100 年後には日本は確実に変わっている。  
変えてみせるよ。」



## 言葉のチカラ

---

言葉の持つ力は時に、  
メッセージをやり取りした時点では、  
発した人間にもそれを受け取った人間にも  
想像もできないほど、大きく  
人の生き方を変えてしまうことがあります。



そして、運命を変える力を持つのが、言葉の力  
なのかもしれません。小池さんの一言は、大西が日本を飛び出してからずっと、  
自身でも気づかないうちに探し求めていた使命そのもので、大西の心の真ん中に飛び込んできました。  
大西は自分が何かに突き動かされるような不思議な感覚を抱きながらも全身に力がみなぎり、  
快感と充実感に満たされていました。

大西は、  
『小池さんの孤独な戦いを支えることができるのは、  
「あなたには何ができるのよ!」という問いを真正面から受け止めることのできた自分しかいない』  
と一人意気込んでいました。

小池さんを精神的にも、実際の政治・選挙活動をも支える「機動する組織」の立ち上げを  
決意します。そして、大西が震災以来自分の使命を求めて所属した組織の中から志を持った  
信頼できる若手経営者を自宅に招き、「小池百合子後援会青年部」構想を朝まで話し合います。  
大西がこの組織を立ち上げるにあたり、どうしても参加してもらいたかった人間が木挽司氏です。



木挽氏は、それまで政治に関しては、  
自分自身の個人的な信条や好みを鮮明にしないことが  
自らの最大の強みであると信じていたし、公言していました。  
(地方で地元密着型の会社経営をしている経営者にとっては、  
政治的スタンスを明確にすることは会社運営上のリスクを  
背負い込んでしまうことにもなりかねないのです。)

大西も環境事業という地方自治体と深い関わりを持つ仕事を  
家業としていたため、木挽氏的心情はたいほど分かっていました。  
しかし大西は木挽氏の中に、あきらめることで自身を納得させ

均衡を保とうとしている「大切なもの」を感じ取ります。

大西はその大切なものを横に置いたままにしている木挽氏の中に、  
いつ崩れ落ちてしまってもおかしくない均衡の危うさを感じていました。

そして、木挽氏の器用に何でもこなせてしまう恵まれた才能を自分に、  
小池百合子後援会青年部で発揮してほしいと心から願っていました。

大西は木挽氏をサブリーダーとして擁立するため、何度も自宅に招き、  
根比べの様な話し合いを延々と続けていきました。

大西は「良い」と信じたことをあきらめることはなく、

木挽氏も最後には「やらせてください」

と言うまで青年部構想に心酔していきました。被害者の会、初期メンバーの誕生です。

後援会青年部設立総会の日取りも決まり、ゲストには当時、小池さんが所属していた自由党の党首、  
小沢一郎氏を招聘することに決定しました。

大西は昂揚した気分のまま、ロイヤルウースター社他数社との交渉のため欧州に向かいました。

## 渦の中で

---

週間の欧州出張を終え、関西国際空港の  
バゲージクレームに向かう長い回廊の途中で、  
大西がいつものように携帯電話の電源を  
ONにしたとたん、着信音が突然なりだしました。  
大西はその偶然に、なぜか悪い胸騒ぎを感じながら  
電話を受けました。

「今朝、小池さんが自由党を離党して、  
新党に合流することになったのよ」

小池さんの秘書に告げられました。

「どういことですか？」

「どうもこうも、そういうことだから・・・説明は今夜行われる役員会でいたします。」  
事態が飲み込めないまま大西は、急遽開催された役員会に、  
空港から直接かけつけていました。

「衆議院で解散総選挙があります。小池はこの選挙にあたり、与党候補として出馬し  
小選挙区で勝つことで発言権を得ることで自身の政治信念・政策を  
国策に反映したいと考えています。」

小池事務所からの説明にその日集まった面々は  
納得と安堵の表情を浮かべていました。  
与党で戦うことは、選挙戦を優位に展開しやすいことは事実ですし、  
自身のビジネスとの接点を見だしやすいという経営者としての  
当然の計算も成り立っていたのだと思います。

しかし、小池百合子という代議士の  
『信念のために孤独な戦い挑む』  
姿に突き動かされていた大西は、

「筋論かも知れないけれど、小沢党首と行動をともにすべきではないか」

と意見を述べますが、すでに大勢は決した後で、議題にもならず  
冷たい視線を受けただけでした。

そしてその日の議題は、小沢党首の代わりに誰を総会のゲストスピーカーとして招聘するか、



が主題となっていました。



小池百合子後援会青年部の発足から2ヵ月で  
選挙活動に突入し、大西は小池さんと一緒に  
兵庫6区各地区の事務所開きや各種団体主宰の会合に  
顔を出します。

徐々に独自のパフォーマンスを発揮していった大西は、小池さんを伴い  
、地元有力企業のトップをアポなしで訪ね、挨拶を重ねていきます  
。

## （続）渦の中で

「医者から一日でも早い手術を勧められました。」

「今は手術どころじゃない。

信弥が本気で小池さんを応援してるんだ。

悠長にベッドに寝ているわけにはいかん。」



選挙活動の最中、大西は、父の癌の再発を

医師から告知されました。一度こうと決めたら決意を変えることのない父の性格を知り尽くしている大西は、不安を胸の中に押しとどめ、父の思いに感謝していました。

結局父は選挙後に手術を受けることになります。

大西の父は手術が必要な体を押して、選挙に協力します。

そして今度は、母が夜中に救急車で病院に搬送され、膜下出血の疑いがあるとのことで入院してしまいます。両親の看病を続けながら大西は選挙戦を戦っていきます。

自公保の与党統一候補者として選挙戦を戦っていた時点では、

小池陣営には楽勝ムードが漂っていました。選挙戦初陣の大西もまた、

危機感を察知できるだけの思慮を持ち合わせていませんでした。

最初の開票速報に、小池陣営として集まった面々は呆然としてしまいます。

結果は3位、その後も最後まで一進一退を繰り返します。

小池さんと二人、車中で、選挙事務所から数百メートルの路地で、とっくに出ているはずの当確マークを待ちつづけた時間は、大西の生涯で最も長い2時間でした。

そして、ようやく万歳をしたのは午前0時をまわっていました。

結果的には、辛勝したものの、結果がすべてという政治の現実直面し

「このままでは次回の選挙では勝てない。」と一人焦燥感を募らせていきました。

同じ日、「小沢は終わった」といわれた自由党の選挙は、

比例区で約660万票を獲得していました。

大西は、『信念を貫き通すこと』や、『人を信じること』、

そして『信念の広がり』を大西自身が陣営に入っていた

小池さんの選挙戦、両親の思い、そして小沢党首の戦いを通して思い知らされました。



## 理想と、現実と、せつなさと

「東京で勉強してみない？」

大西は小池さんから声をかけられます。

大西はあらためて自分の使命を思い返していました。

”政治を、そして選挙を、もっと知りたい！”

大西の願いは切実なものに変化していました。

小池さんは、与党（保守党）に入党しても、孤独な戦いを

続けていかなければならないことにかわりなく

選挙戦を通じて心を許せる戦友となった大西を信頼し

大西に側についていてほしいと願っていました。



その年の秋から、時間が許す範囲でという約束で  
議員会館に出入りすることになります。

大西は、この年の暮れ、小池さんに随行して

7名の超党派の国会議員をフォローしながら台湾を訪問し、李登輝前総  
統の邸宅での晚餐会に招かれます。

翌年の春にはエジプトに飛んでワリ副首相以下、  
主要閣僚数人との面談や、小池さんが推進する

「日本エジプト友好の森」植樹式にも参加していました。

一見華やかに見える小池さんの政治活動は、実は小池さんが独自の人脈を少しずつ育てて、  
作られてきたものなのです。小池さんの草の根活動は国民にも、ましてや選挙民にも  
全く知られていませんでした。大西は小池政治の真実の姿を知ってもらう方法を、  
寝ても覚めても熟考していました。

当時、小池さんは朝早くから登庁し、心身ともに

クタクタになるまで働き、一日の終わりに高輪議員宿舎へ向かう帰り

道に、コンビニ弁当を購入して宿舎に入る

毎日を過ごしていました。

小池さんは周知の通り、政治の世界に飛び込む前は

トップキャスターとしての地位を確立し

個人の夢ならば叶えられる立場にいました。

それでも、日本を変えたいという夢のためにすべてを捨てて

政治の世界で闘うことを決意しました。



でもその闘いは理想と引き換えに本当に孤独で不安なものでした。  
当時の彼女は、どこにいても冷ややかな視線や冷笑の中にいました。  
大西は、そんな彼女が疲れきって体を引きずりながらも、  
コンビニの袋を手に顔だけは上を向いて  
宿舎に入っていくその後ろ姿を見送りながら

「国会議員って一体何なのだろう...」

というせつなさに、胸を締め付けられ涙を流したことが何度もありました。

「たった一人でこの世界に飛び込んだ頃も、  
そして多分、今も小池さんは全力で戦っている。」

大西がそれを一番よく知るひとりであるという思いは  
今も変わることはないだろうと思います。

「ニューヨークのテロ事件を見て、もうこれは直接政治に携わらなければ間に合わないと思って応募してきました。」

「うちの事務所に興味を持った理由を教えてくださいな？」

「私の父は防衛庁を定年退職した元自衛官です。  
私はこの父の職業を誇りに生きてきています。  
小池さんの国防のあり方は、私が望む国のあり方を的確に表現してくれています。」



「アメリカの大学院に行った後、そのまま現地で働いていたんだあ？」

「私は、一年前まで、アメリカで日本人向けの雑誌の編集をしていました。  
その後、一年間かけて世界中を旅していました。」

「どこが一番印象に残っている？」

「イスラム社会、特に中東に入ったときの緊張感は言葉になりません。  
また、英語も通じないところで病気になったときには心細かったですね。  
今では良い思い出ですけどね。」



当時、東京や地元事務所などに、秘書志望の若者や政治家志望の学生が事務所にコンタクトしてきた場合、大西が対応していました。

2001年9月28日、議員会館の地下一階で出会った道下修というこの若者は、まるで若いころの大西自身を見るような、ひたむきさと純粋さ、それゆえの危うさを同居させていました。

『それにしても、テロを見て実際動き出すとは、たいしたものだ。』

インタビューを終えた後、彼の印象が脳裏を離れませんでした。  
彼には「周りの人間が彼を放っておかせない何か」を持っていました。  
そして、大西は彼を小池さんの秘書として推挙し、  
年末には彼は秘書として採用されます。

この若者は今後、大西の志信会設立に大きな役割を果たすこととなります。

2002年2月、大西は名門宝塚ホテル内を駆け回っていました。80年の歴史をもつこのホテルの敷地に一歩足を踏み入ると、そこは異空間。時代や場所を越えていくような不思議な感覚に包まれます。時空を超えたようなホテルの雰囲気の中で、大西は焦燥感に襲われていました。



小池さんを応援し始めて3度目の新年を迎え、集まるメンバーにとっては、小池百合子後援会青年部に参加している感覚はもはやなくなってしまい、

『大西に声をかけられたので、仕方なく顔を出している』

というものでした。メンバーたちは冗談まじりに「あなたも大西さんの被害者ですか？」を会話の枕言葉に使っていました。

この言葉を聞いたとき大西は高笑いをしながら、心の中で「ゆるしてください。」と謝っていました。

宝塚ホテルにメンバーの家族を招いて開催された

小池百合子後援会青年部ミーティングは、『おつきあい』を少しでも楽しめるものにしよう  
と大西が画策した『苦肉の策』でした。

それでも『大西信弥とその被害者の会』の性格を変えることはできず、  
「このままでは、小池さんにも、会に集って何かを吸収しよう  
とされたメンバーの方々にも申し訳ない。」  
と改めて気づかされただけで、大西はいたたまれなくなっていました。

打開策が全く見つからない状況の中で、大西は小池事務所から

「政治家を育成する組織を作って」  
と再三に渡り要求されていました。

小池さんは、『百志塾』とその組織の名称も決めていました。

そもそも、百志塾創設の話が出てきたのは2001年の夏ごろでしたので、  
「そんなご無体なあ...」と思いながらも、いつまでも保留にしておくこともできず、  
大西がこの組織を立ち上げるべきか結論を出さなくてはならない時期が近づいていました。  
百志塾の創設は、小池百合子後援会青年部を政治と経済に分断することを意味します。



『百志塾』は小池百合子後援会青年部とは異なり「時間の許す範囲内で」できる支援ではなく、大西自身が主体となり政治家を育成する組織を創っていかなければなりません。

悩み抜いた末に大西は『百志塾』の設立を断行します。

大西がそこまでして「百志塾」を始めたのは、自分自身の子供をつくることができない大西にとって、政治家を育成する百志塾は、生きた証を残す絶好の機会になるはずだと信じたからでした。

## 「百志塾」始動

私の政治生活も十年を迎えました。

初志として掲げた「改革」の御旗は色あせるどころか、

私の初代秘書中田宏君（現：横浜市長）をはじめ、

「志」を共にする仲間達に広く深く受け継がれ、今「百志塾」で花開こうとしています。

「政治を変える。日本を変える。」の理念の下、同志が集う道場が「百志塾」です。

強く改革の意思を持ち続け、挑戦を重ねることは容易ではありませんが、

同じ「志」を有する100人の仲間あれば、世の中は動きます。動かせます。

逆に言えば、一人では何もできません。

今、この国は、未来を設計し、責任を持てる「心ある同志」の結集を必要としています。

「百志塾」を互いの自己啓発と日本改革の場として共に盛り上げて行きたい

と思います。今後とも変わらせず、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

【2002年7月31日 百志塾 塾長 小池百合子】

「理念によって集まる100人の仲間」が

「未来を創り世界を変えていく」

という小池さんのビジョンは大西に明確な目標を与え、突き動かします。早速、百志塾創設パーティーを企画した大西はメインスピーカーとして中田宏横浜市長(当時)を招聘することを決めます。



この年（2002年）の春の 横浜市長選挙

1990年から3期市長を勤めてきた高秀秀信氏の

再選は確実視されていたなか、中田氏は横浜市の逼迫した財政に注目をあて、改革を旗印に横浜市長選“奇跡の勝利”を手に入れました。中田市長は、若い政治家志望者だけでなく、政治家を支援する若手経営者の両方が注目する数少ない政治家でした。



中田市長の招聘に奔走していた大西は、中田市長擁立を陰で支えた陳氏と 出会いました。百志塾の設立総会の事前打合せに現れた陳氏は、長身に立派な体格をもち、力強い眼が印象的な中国の名将のような風貌と礼節をわきまえた偉丈夫でした。横浜で開催された総会の後、大西は陳氏と語り合い、

「ここまで自分と共通する思いを持つ男がいるのか」



という驚きと嬉しさで朝方まで飲み明かしました。市長選への出馬に踏み切れない中田氏 ( 当時、衆議院議員 ) を  
「ここで決断しなければ、おまえは政治家として終わりだ！」  
と叱咤したエピソードや、たった4人で400人の支援者がいると思わせた機略など、  
中田 - 陳の力強い信頼関係は大西の心を大きく揺さぶります。

大西は小池さんとの関係を重ね合わせ、  
「まだまだ自分なんて大したことない」とつくづく思い知らされました。  
そして大西はこの年の秋、25年間籍を置いていた父の会社を辞します。

「小池が『大西君に公設秘書になって欲しい』  
といっているのよ。どうかなあ？」  
「えっ！？・・・・・・」  
「小池事務所にはあなたの力が必要なのよ。」  
「少し考えさせてください。」  
「もちろん、じっくり考えてほしいけど、  
あなたにとっても、凄いチャンスだと思うの。」

百志塾の立ち上げに成功し政治手腕を発揮し始めた大西に、小池事務所から公設秘書就任への打診がありました。



小池さんの理念を必ず実現してみせる  
と決めていた大西は、小池事務所の中で小池さんの活動をサポートしていくべきか、  
百志塾を独立組織とし、小池さんの掲げた理念に純粋に活動を進めていくべきか  
の選択を迫られていました。大西は大いに悩みます。

これまで孤独な戦いを続けてきた小池さんが自分の力を必要としている  
という事実は、大西を拘束していました。  
悩み続けていた大西は、ふと部屋に飾ってあった色紙に目を向けます。

『夢は限りなく』・・・  
祐ちゃん（野平調教師）から送られた色紙には温かな文字が記されていました。

「私は『100人の仲間』をつくるためには、私が小池事務所に所属してしまっはいけないと思うのです。」

大西は真正面から自分の想いをぶつけていました。

「本当に日本を変える仲間の力を結集させるためには、  
小池応援隊を作るのではなく、いろいろな個性を持った、  
未来をつくる政治家を育てなければならないと思います。  
これは片手間でできることではなく、私は父の会社も先日退職いたしました。  
小池さんの百志塾構想に情熱を傾けています。  
小池さんの公設秘書というお話は、とても光栄なのですが、私は百志塾の構想を成功させるために、  
お断りさせていただきたいと思っています。」

大西の決断に小池さんは微笑みながら、快諾してくれました。



小池事務所と連携を取りながらも、独立した組織として大西は「百志塾」を政治団体として登録しました。

早速大西は、翌年(2003年)春に行われる統一地方選挙に挑む候補者を擁立するため、積極的に活動を始めます。

木挽氏、そして小池事務所の秘書になっていた道下氏にも統一地方選挙への挑戦を促しました。木挽氏は前述の通り政治への関わりを避けていたので、当然「自分が政治家になることは全く考えられない」という態度を固辞していました。しかし、彼が小池百合子後援会青年部のサブリーダーとして、日頃から自分のできることを精一杯実行している態度を見てきた大西は、彼が政治の世界に入ることによって彼自身が生まれ変わると確信していました。

粘り強く木挽氏を説得した大西は、木挽氏の擁立に成功します。そして、大西が未来を託したいと期待していた道下氏にも打診をし、快諾を受けます。大西は、二人が「やります！」と統一地方選挙に出馬を決めたときには、「万一にも彼らを落としたら、一切政治の世界から身を引こう」と誓いました。

小池事務所からの出馬が決定した道下氏は、  
宝塚市議会議員選挙に向けて準備を始めました。  
道下氏は小池事務所の宝塚支所を本拠地として、  
小池さんの支援者との連携を強めていきました。  
大西も百志塾からの出馬ではなくても、小池事務所から出馬を決定した  
道下氏の決意を応援するため、転居の世話から選挙戦略立案まで  
全力でサポートしていました。

道下氏が宝塚市議選の準備を進めているさなか、  
小池事務所から道下氏に兵庫県議会議員選挙の出馬を促す一報が入りました。  
県議会議員選挙は市議会議員選挙に比べ選挙区も広く、  
定員も少ないためより当選の可能性が低くなります。  
しかも、道下氏は今回の選挙が初陣であり、更に地元との結びつきがないため、  
県議会議員選挙では、かなり苦戦が予想されます。

道下氏は家族を巻き込んで、この選挙戦を闘うべきかを検討していました。  
道下氏は秘書として小池事務所にお世話になっていることや、  
道下氏自身もこの高いハードルにチャレンジをしてみたい  
との思いが日増しに強くなっていき、  
最終的に県議会議員選挙に挑むことを決意します。  
そして、道下氏が県議会議員選挙の準備を進めようとしていた矢先、小池事務所から、

「あなたはやっぱり市議会議員選挙にでなさい。」

と道下氏のもとに県議会議員選挙の出馬取りやめの指令がはいってきました。

「大西さん、県議選の出馬が取り消されて・・・」

大西の元に電話をかけてきた道下氏は気が動転していました。  
このようなことは政治の世界では度々起こることかも知れません。  
また道下氏は小池事務所に身を預け、今回の選挙も事務所から出馬する以上、  
大西が口を挟む余地はないのかもしれないかもしれません。  
しかし大西は携帯電話を取ります。

「なめとんかー！」

部屋のガラスを振動させるほどの爆声が響きました。

「ちょっと、説明させて・・・」  
「なめとんか！ということです。」

ガチャ！

大西は小池さんにどなりつけたうえ、電話を一方的に切ってしまいました。

小池さんが人の心、特に人生を賭けた決意を翻弄するような

政治家であってほしくないという思いと悔しさで

大西の胸は張り裂けそうになっていました。

この後小池事務所の秘書からも何度も携帯電話が入りましたが、

大西は一切電話をとりませんでした。

もちろんそうすることで、小池さんの関係が壊れてしまうことは覚悟していました。

しかし、大西は、小池さんの口から自己弁護するための

言い訳を聞きたくはありませんでした。

大西は小池さんがどんな思いで政治の世界に入り、

そしてこれまで闘ってきたのか、それを分かっているから

これから政治の世界で全てを賭けて闘おうとする若者の

人生を大切にしたいと電話がかかってくる度に心の中で祈り続けていました。

大西は今日この思いが小池さんに届いていなくても、

いつか分かってくれるはずだと信じ続けています。

その後、道下氏は出馬を断念し、小池事務所も辞し、政治の世界から一線を引きます。

## 決別

2002年12月25日、小池さんが自由民主党に  
入党することを表明しました。

このニュースは大西の頭の中を何度も駆け巡ります。  
あの小池さんが自民党に入党する・・・

小池さんはキャスターから政治家への華麗な転身をしました。  
しかし、最初こそ、細川内閣の総務政務次官をつとめ、  
広告塔として活躍していましたが、支持基盤を持たない  
小池さんの選挙は薄氷を踏むような思いをしながらの、  
苦戦が続いていました。そして、事務所の維持と政治活動で  
経済的にもいつもぎりぎりの状態でした。  
それでも、自分の信念のために愚痴一つ言わず、  
戦い続けてきた小池さんの生き方は  
本当に美しいと思っていました。  
だからこそ、大西は数年間にわたって多くの方々に  
迷惑をかけながら、小池さんを全力でサポートし、  
動員に奔走していました。

「そういうあなた方こそ何ができるのよ!!」

この言葉を聞いてからの数年間を思い、

「今の小池さんに何ができるのだろうか？」  
とつぶやいていました。

2003 年正月、自民党入党後はじめて行われた  
小池百合子主催の新年会は、今までにないほど多くの人々を集め  
大成功しました。  
あれほど苦労していた動員も参加者が  
あっという間に集まったと聞き、大西は、  
「これで私の役目は完全に終わった。」と、  
なぜかすがすがしい気持ちに満たされていました。

そしてこれが、大西が本当に小池さんと  
政治活動の場で決別する結論を出した瞬間でした。  
この時、大西は3年前小池さんが自由党を離脱した時の宣言を思い出していました。



『最後に、小沢党首の政治家としての爆発力、構想力、責任感、スピード感、ダイナミックさ...、私はあらゆる面で高く評価し、尊敬しています。それは今後も変わらないでしょう。山の頂きを極める道程を異にするだけです。この国が小沢一郎という稀有な人物を必要とする瞬間は必ず来ます。ただ苦しい時も、一生懸命支え続けたはずの私にこのような結論を出させないでください。お願いします。』

大西は、自分と小池さんの関係を小池さんと小沢代議士の関係にだぶらせていました。その後の小池さんの活躍は、敢えて語らなくても、多くの方がご認識されている通りなのだと思います。

## わが為すこと、我、知る

---

大西が小池代議士と決別しても、なかなか処分できないものがありました。その一つが日産の最高級車シーマです。この車は大西が「小池さんに恥をかかしてはならない。」と言って自腹で購入した車です。小池さんを乗せて永田町から都内近郊を移動する際に使用しようとおもっていましたが、結局小池代議士を乗せる機会を持たないまま大西は小池さんと決別してしまいました。大西にとってこの車はやり残したことの象徴だったのかもしれません。

その後、久しぶりに小池代議士から「徳島県知事選挙の応援に入るのだけれど、車での往復をご一緒してもらえない？」と連絡が入りました。

大西はシーマとともに、小池代議士を乗せて6時間余りを走りました。

道中は思った以上に会話が弾み、大西の胸にも懐かしさが込み上げてきました。結局肝心な部分には、小池さんも大西も触れぬまま時は過ぎましたが、大西にとって自分の進むべき道に確信を持てた旅になりました。



「多分、私の思いを一番理解してくれているのはこの人に違いない...。」

小池さんと別れた後、大西は小池さんに心から感謝してうれし涙を流しました。たとえ認知はしてもらえなくとも、小池さんの政治理念の継承者として残った人生を精一杯生きていくと改めて誓いました。

「わが為すこと、我、知る」

志信会は、大西が理念のために生きることの喜びを知った時に始まりました。

だから大西はいつでも、どんなことが起こっても、本当に楽しそうに笑っているのかもしれません。徳島から戻った大西は、シーマを処分しました。

小池代議士というフィールドでやり残したものと一緒に。

## 大西信弥物語

<http://p.booklog.jp/book/89592>

著者：大芝太郎

電書版作成：あるほっぷ倶楽部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/alhopclub/profile>

あるほっぷ倶楽部

<http://alhop-club.com>

志信会

<http://shishinkai.org>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89592>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89592>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ